〔資料紹介〕

茨城県台門貝塚の採集遺物と周辺遺跡

寺　門　義　範

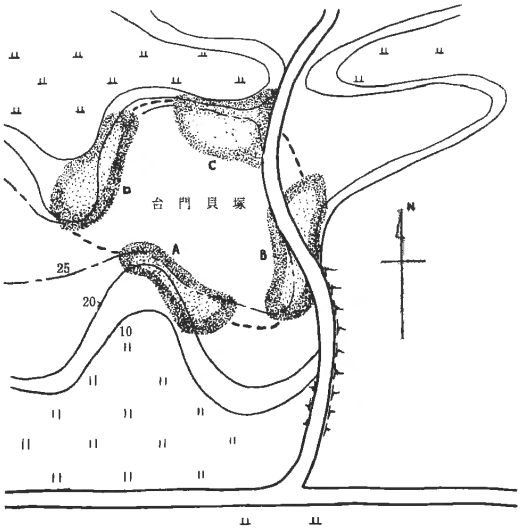
Ⅰ．はじめに

ここに紹介する資料は、1966年の夏、霞ヶ浦周辺地域の遺跡踏査の折に、筆者が稲敷郡桜川村地内に所在する台門貝塚を訪ずれた際に、採集してきた資料の一部である。

本貝塚は、霞ヶ浦南岸を形づくっている稲敷台地東端付近に、東から湾入している俗称、〝阿波の入江〟に臨んだ北側台地上に位置し、大小4つの溺れ谷、谷頭斜面部に貝塚を伴っている複合タイプの遺跡である。この遺跡の占地する台地上は、大半がすでに農耕地となっており、たばこ、小麦などの栽培が行なわれていた。この付近における遺物の散布は小破片ばかりをみたにすぎない。しかし、斜面は貝層の露出によって耕地としての手も加えられていないために、層序を明瞭に観察することができる現状にあった。しかも、地域住民には、かようなものには関心あるものが少ないらしく、ほとんど耕作以外には荒された形跡を認められず、保存状態は良好であった。昨今の開発に伴う遺跡破壊や心無い人々による乱掘が増加している現状を鑑みるとき、極めて貴重な存在ということができよう。

Ⅱ．台門貝塚

茨城県遺跡地名表（註1）によれば、本貝塚は「稲敷郡桜川村大字四箇字松の木」に所在する貝塚遺跡で、縄文時代中期の遺跡として記録されている。学界に知られるようになったのは比較的古く、陸平貝塚（註2）が調査された明治11年を隔てること僅かに15年、明治26年に八木奘三郎、下村三四吉両氏によって調査が行なわれた「椎塚貝塚」（註3）の報文中に「常陸国河内郡阿波村字四箇」所在の新発見の遺跡としてみることができる。しかし、当時はまだ日本の考古学界の胎動期



第1図　台門貝塚の周辺地形略図（寺門義範作 1966）

でもあり、ただ単に貝塚が存在したといった記録のみに止まり、詳しい調査、研究がなされた様子もなかった。その後は、本貝塚の所在が知られるのみで学界の注意もひくこともなく、なんら学術的なメスも加えられなかったのである。

そこで、本稿では筆者が本貝塚を踏査した折に観察した事柄を、所見をまじえながら述べてみたい。俗称〝阿波の入江〟に接した台地上（海抜標高20～25m）に位置する本貝塚は、利根川以北の貝塚遺跡に特徴的な「谷頭斜面部に貝塚を伴う台地上集落」であり、しかも霞ヶ浦周辺地域の中では、美浦村陸平貝塚、江戸崎町吹上貝塚（註4）、土浦市上高津貝塚（註5）、美浦村大谷貝塚、麻生町井貝・於下貝塚、玉造町若海貝塚、玉里村部室貝塚と並ぶ大貝塚群の一つに数えられるほどの大規模な貝塚であって、〝阿波の入江〟に臨んでいる遺跡群の中では、中核的な位置を占めている。

本遺跡は前述の如く、4つの溺れ谷、谷頭斜面部にそれぞれ貝塚を伴い、台地上に広い土器散布地を有する。この土器散布の範囲は、東西約130m

南北約100mにわたり、貝塚の地点によって散布している土器の型式や貝類の種類が、僅かずつではあるが異なっている(第1図)

A地点貝塚、俗称“阿波の入江〟に直接臨んだ南面する溺れ谷谷頭斜面に形成された貝塚である。露頭の断面観察によると、この貝塚は3つの貝層からなっているようである。まず最下層と考えられる貝層中（中型サルボウ・ハマグリ主体）には加曽利EⅢ式を認めることができ、中間の貝層中（中型のサルボウ、ハマグリ、オキシジミ）からは称名寺式、上層（中・小型のハマグリ、アカニシ、アサリ、バカガイ主体）からは堀之内Ⅰ式の存在をみることができた。

B地点貝塚、〝〟阿波の入江〟に開口する小支谷側壁溺れ谷谷頭斜面に形成された貝塚で、本遺跡においては東側貝塚である。しかも本遺跡は、第1図にも示した通り村道によって二分されており、明確なる堆積状態を確めるまでに至らなかった。散布している貝類から、中・小型のハマグリ、アサリ、オキシジミのほか、アカニシなどで構成されているものと考えられる。土器は、堀之内Ⅰ・Ⅱ式と加曽利BⅠ・Ⅱ式を見ることが出来た。

C地点貝塚、〝阿波の入江〟に開く鉤状小支谷（返り谷）谷頭 斜面部に営なまれた貝塚である。貝層は草が繁茂していたために、はっきりと把えることができなかった。が、中型のハマグリ・サルボウなどが目立って散布していた。また、この地点からはチョウセンハマグリも発見することができた。採集土器は加曽利EⅡ、EⅢ式の他、堀ノ内Ⅰ式を僅少ながら認めることができた。

D地点貝塚、本地点貝塚は、C地点貝塚と同一の支谷の側壁溺れ谷谷頭斜面に形成された貝塚であり、本遺跡唯一の半鹹貝塚である。貝種は、鹹水産のハマグリ、アサリ、シオフキ、オキシジミアカニシのほか淡水産のシジミ類で占められていたが、アカニシ以外は、おおむね、中・小型の成育状態であった。土器としては、加曽利BⅡ・Ⅲ式、安行Ⅰ・Ⅱ式、立木Ⅲ式、姥山Ⅱ・Ⅲ式、前浦式と後期中葉以降、晩期前半期に至る諸型式のものが認められ、いわゆる「製塩土器」といわれている土器破片も確めることができた。

以上、4つの地点の貝塚についてまとめてみると、本遺跡の営なまれていた時期は中期後半期から晩期前半期にわたる期間ということが考えられ、貝層形成の序列を考えてみると、（ただしここでは土器型式を便宜的に時期にあてはめてみたので必ずしも完全なものとはいえず、当然、時期設定上の矛盾が生ずるであろう）

□加曽利EⅡ式期	C地点貝塚
□加曽利EⅢ式期	A・C地点貝塚
□称名寺式期	A地点貝塚
□堀之内Ⅰ式期	A・B・C地点貝塚
□堀之内Ⅱ式期	B地点貝塚
□加曽利BⅠ式期	B地点貝塚
□加曽利BⅡ式期	B・D地点貝塚
□加曽利BⅢ式期	D地点貝塚
□安行Ⅰ式期	D地点貝塚
□安行Ⅱ式期	D地点貝塚
□立木Ⅲ式期	D地点貝塚
□姥山Ⅱ・Ⅲ式期	D地点貝塚
□前浦式期	D地点貝塚

以上のように考えてみたのであるが、この試みは表採資料によるもので、あくまで仮定の域を脱し得るものではなくただ単に、このように理解することもできるという筆者の推定にすぎない。しかし、本遺跡のように、いくつかの時期にわたって営なまれたと考えられる遺跡においては、各地点の貝塚が必ずしもどの時期においても、その用をなしていたかは考えられないことは周知の事実である。かような事から類推した場合、先のような試みは無意味とはいえないであろう。

Ⅲ　採集遺跡

ここに紹介した資料は、筆者が本貝塚を踏査した際に採集してきた資料の一部である。この資料をもって、ここで土器論を展開するとか、あるいはまた、型式論を云々するつもりは全くない。掲載した資料はすでに周知のものばかりであり、かつ層序的に明確なデーターの下に採集した資料ではないからである。したがって、縄文中期阿玉台式の時期から晩期前浦式の時期に至るまで本遺跡が存続した遺跡であるということを、諸氏に理解していただければよいのである。

Ⅳ　周辺の遺跡

次に、台門貝塚が営なまれた地域の理解を深める

ために周辺遺跡のあり方に関して、第2図を参考にして述べてみることにしよう。

村坪貝塚（第5図－2）

台門貝塚の北方0.6kmの地点に位置する。本貝塚は、稲敷都桜川村四箇字村坪にあり、筆者が遺跡踏査の折に新たに発見した遺跡である。時期は中期から後期前半期にわたり、阿玉台式、加曽利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ式、堀之内Ⅰ式の土器が発見されている。立地形態としては、3つの支谷谷頭斜面部に貝塚を形成しており、台地上に土器散布をもっている。現在、台地上は宅地と畑地になっており、斜面になった畑地には土器破片のほかハマグリ、サルボウ、アカニシなどの細片が散布し、貝層は地表面には露出がほとんどみられないことから、深部に堆積しているものと考えられる。

所作貝塚（第5図－3）

桜川村大字四箇字山来に所在している。本貝塚は現在、霞台ゴルフ場の敷地となっている。以前清野謙次博士によって調査が行われ（註6）、繊維土器と諸磯式土器の出土遺跡として注目を集めて以降、ほとんど顧みられることもなくレジャー産業の餌食になってしまった。筆者が本貝塚を訪づれた頃には、南口する小支谷の側壁斜面に貝塚の存在が確められ、斜面の貝塚に沿った台地上には径3～4mの地点貝塚が3ヶ所みられた。貝類は大型のマガキ、チョウセンハマグリ、アサリ、サルボウ、バカガイ、ハイガイなどの他、中型のハマグリ、オキシジミなどによって占められており、また、大量にオオマテガイの堆積がみられた。採集土器としては縄文前期の諸磯a・b式と、浮島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の破片をみることができた。以上から本遺跡は、縄文時代前期に属する貝塚遺跡と考えられ、遺跡の立地の上からみても、一般に小地点貝塚群を特徴として持つ縄文前期前半期（関山、黒浜式）からの流れを汲んだ立地傾向を示しているものと考えられ、斜面貝塚形成への過渡的存在のタイプのものということができよう。

大室貝塚（第5図－4）

本貝塚も、前記清野謙次博士によって調査紹介がなされた遺跡の一つである（註7）。遺跡は稲敷郡桜川村大字四箇字来栖に所在し、現状は山林と畑。貝塚は、主に〝阿波の入江〟北側最奥付近に発達した鉤状支谷側壁の溺れ谷谷頭斜面にみられ鹹水産の貝類によって構成され、台地上に土器散布地がみられる。規模はそれほど大きなものとは思えないが、遺物の出土量から豊富な内容を持つ遺跡とされ、古くから縄文中期の阿玉台式土器出土遺跡として著名である。また、本貝塚の資料としては、清野謙次博士が調査された資料の写真の一部が、高橋良治氏の手によって、1963年に紹介されたが、そこには阿玉台式土器とともに勝坂式、加曽利EⅠ式をみることができる（註8）。筆者が本貝塚を訪づれて採集したものの中には、加曽利EⅡ式のものも含まれている。

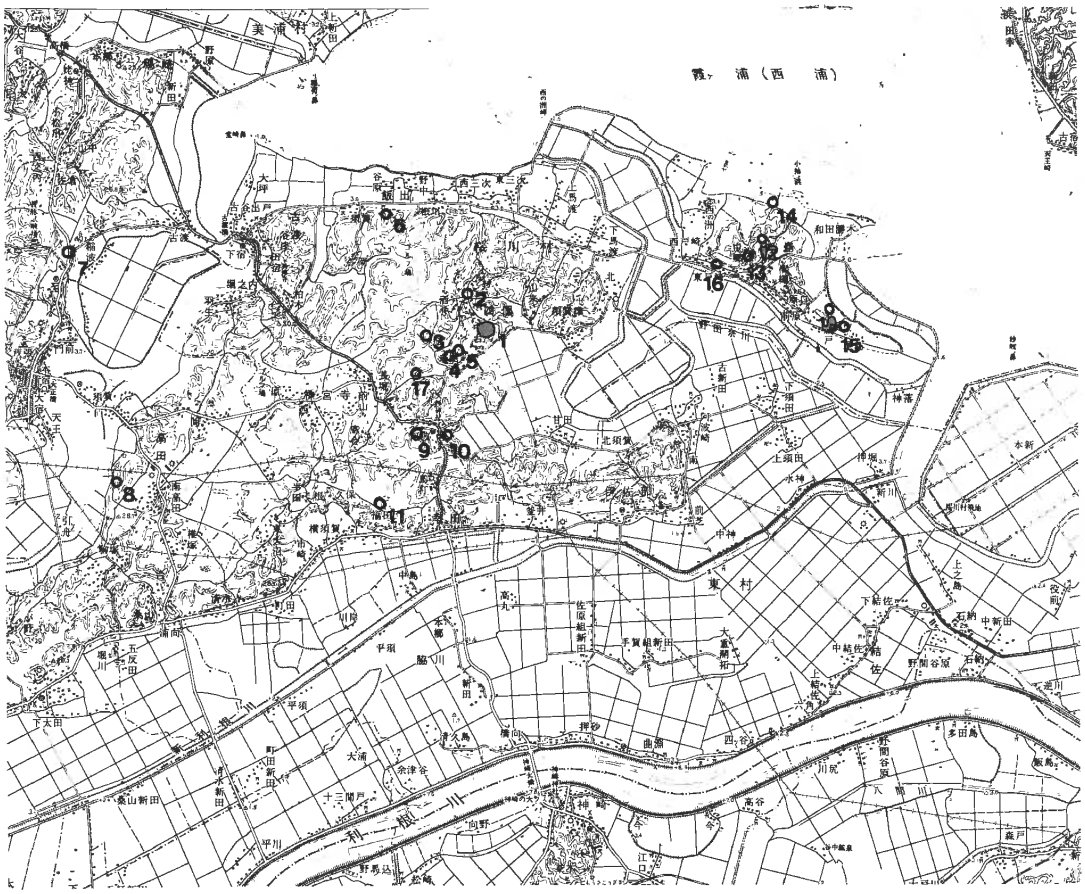
平　貝塚（第5図－5）

大室貝塚と同じ台地上に近接して存在する本貝塚は、桜川村大字四箇字境に所在している。未だ明確な調査が行われたという記録もなく、その実態は不明な点が多いが、筆者が採集した遺物には加曽利EⅡ式以降、加曽利BⅠ式までのものがみられ、中期後半から後期前半期にわたる遺跡と思われる。しかも、地表面にはハマグリ、アサリ、など貝片が僅かに散っているにすぎず、包含層は深部に存在しているものと思われる。

広畑貝塚（第5図－6）

稲敷郡桜川村大字岡飯出字根本にある。本貝塚は、既に所謂「製塩土器」を出土する遺跡として知られ（註9）当地域の中でも低地に存することで特異な存在になっている。

遺跡は、霞ヶ浦に臨んだ湖岸段丘に営なまれており、標高7～8mを数えるにすぎず、段丘上に主鹹の貝塚を形成し、段丘面から前面の水田に至るまでの広い範囲に土器散布地をもっている。現在では、遺跡の背後に存在する後背湿地の部分からも土器の出土が知られ、段丘には製塩に伴う捨て灰遺構の存在も確認されている。また、段丘上にある貝塚は、過去の調査事例では、後期前半から中葉にかけて営なまれ、後期末、即ち安行Ⅰ式以降においては貝塚を伴っておらず、晩期前半の前浦式の時期まで海水を利用した製塩行為が行われていたものと考えることができる。ちなみに、本遺跡にみられる無文薄手粗製の所謂「製塩土器」は、「第三の土器」として学界の注目を集めたのではあるが、昨今までの研究成果として、時期によって幾らかずつ器形変化をしていくことが明らかにされつつある。本遺跡の場合、未だ部分的な成果のみで確実とはいいがたいが筆者が垣間みた限りでは安行Ⅱ式から立木Ⅲ式の時期に活発な製



第2図　台門貝塚と周辺遺跡

1．台門貝塚(稲敷郡桜川村大字四箇字松の木)
2．村坪貝塚(稲敷郡桜川村大字四箇字村坪)
3．所作貝塚(稲敷郡桜川村大字四箇字山来)
4．大室貝塚(稲敷郡桜川村大字四箇字来栖)
5．平　貝　塚(稲敷郡桜川村大字四箇字境)
6．広畑貝塚(稲敷郡桜川村大字岡飯出字根本)
7．吹上貝塚(江戸崎町法蓮坊甲526)
8．椎塚貝塚(稲敷郡江戸崎町椎塚字中の峯)
9．南　貝　塚(稲敷郡桜川村大字阿波南)
10．和久保貝塚(稲敷郡桜川村阿波字上久保)
11．福田貝塚(稲敷郡東村大字伊崎字福田)
12．上の台貝塚(稲敷郡桜川村大字浮島字上台)
13．岡の内遺跡(稲敷郡桜川村大字浮島字岡の内、及び貝ヶ窪)
14．平山遺跡(稲敷郡桜川村浮島字平山)
15．尾島遺跡(稲敷郡桜ヶ川村大字浮島字宮ノ脇)
16．前浦遺跡(稲敷郡桜川村大字浮島前浦)
17．天神台貝塚(稲敷郡桜川村大字阿波天神台)
18．後九郎辺遺跡(稲敷郡桜川村大字浮島字後九郎辺)

塩活動が展開されていたものと推測される。

筆者の調査によれば後期末の安行II式に伴うとされる、口唇部上を指で抑えたり、口辺部を指先で両側からはさむようにして整えたりしたもので指による加工が顕著なもの、しかも、底部は小形平底で、多くは網代痕が施されているものと晩期初頭の立木III式に伴うと考えられる口縁部断面が片刃彫刻刀状に尖り、垂直もしくは僅かに内傾する立ち上りを有し、底部は小形平底で擬似木葉もしくは棒状圧痕がつけられているものが多い。

次に、後期前中葉の貝塚を構成している貝類をみてみると、大型のアカニシ、マルサルボウ、ハマグリを主体として、アサリ、オキシジミ、マガキ、バイなどが見られ、稀にオオノガイも見られた。淡水産としてはシジミ類、カワニナの存在がみられる。

吹上貝塚（第5図－7）

本貝塚は台門貝塚が営なまれていた地域から少し離れ、小野川谷に面した側壁斜面と、それに近接した鉤状溺れ谷谷頭部に貝塚を持つ台地上集落遺跡である。古くは鳥居龍蔵博士によって調査がなされ、その時の調査も本遺跡の全貌を極めるものではなく、人類学上の見地から、小野川谷に面する貝層の一部を調査したに過ぎなかった。

現在、本貝塚は畑と宅地になっており、一部は道路により破壊をうけている。所在地は江戸崎町法蓮坊甲526である。3地点の貝塚は、小野川谷に接した側壁斜面に2地点と、鉤状溺れ谷谷頭部に1地点がそれぞれ営なまれており時期を異にしているようである。

これらの貝塚を古い順に述べてみると、以前、清野氏が調査した小野川谷に面する側壁斜面の北地点のものは、中期前半期五領ヶ台式、阿玉台式の時期に相当するもので、大型のマガキ、アカニシ、チョウセンハマグリ、サルボウなどによって貝層が構成されている。次で南側地点の貝塚においては、加曽利E式、堀之内I・II式、加曽利BI式が認められ、中期後半から後期の前半に継続する貝層と考えられ、貝の種類としては中型ハマグリ、オキシジミ、アカニシ、サルボウ、バカガイなどによって占められている。更に鉤状支谷谷頭の貝塚は、加曽利BII式以降、安行I・II式、立木III式、姥山II・III式、堀之内BIII式、前浦式などの存在が確められており、後期中葉以降晩期前半の所産と考えられる。貝類としては淡水産が量的に鹹水産をしのぎ、ハマグリ、オキシジミなどの鹹水産も小型なものが目立つようである。

また、台地上の土器散布は、豊富な量を示し、このような状況をみるとき、先に台門貝塚でも述べたごとく、長期間にわたって営なまれた生活拠点においては、時期により僅かに集落の中心が移動しているといういわゆる「地点移動」が存在していたことが考えられる。つまり、当時の人々は現代人以上により自然との結びつきが強く、少しの環境の変化でも敏感に反応していた証左として、理解することができるのではなかろうか。

椎塚貝塚（第5図－8）

吹上貝塚同様小野川谷に接した側壁台地上に立地している遺跡である。

「……余等が今回発掘セシ貝塚ハ、茨城県河内郡高田村大字椎塚小字中ノ峯ニ在リテ、阿波ヲ距ル東方一里半、紫崎ヲ距ル、西南二里、而シテ小野川ヲ隔テ、江戸崎ヲ距ル西北十四、三町ナリ。江戸崎ヨリココニ至ラントセバ……（中略）……カクテ又丘腹ノ小径ヲ上ル、凡二丁餘ニシテ、路側ニ貝殻ノ異点々散布セル箇所アリ。是レ即目的トセル該貝塚ニシテ、殊ニ此部八連岡中ニ在リテモ少シク内方ニ凹彎セルヲ以テ、一見直ニ其場(場)所ヲ知リ得ベキナリ」と記されている（註10)。先の吹上貝塚が小野川谷の北側台地上に占地していたのに対して、本貝塚は、それと対峙するように東南方向の南側台地上に占地している。

遺跡は小野川谷に面した側壁斜面と溺れ谷谷頭斜面に各1ヶ所、北側から侵入する小支谷谷頭に1ヶ所の貝塚と台地上土器散布地とで構成されている。しかも貝塚を形成している貝類は、時期と地点によって少しづつ構成貝種を異にしているのであるが、概して中・小型のハマグリ、アサリ、アカガイ、アカニシなどが多いようである。また、小野川谷に面した側壁斜面の貝塚をのぞく2地点の貝塚には僅かながら、淡水産の存在を認める。

次に、これらの貝塚が形成された時期は、採集した資料と過去の調査例などから考えあわせると、後期前半から晩期前半に至るまで地点を移しながら存続していたことが分かる。つまり、後期前半の堀之内I式は側壁斜面貝塚において認められ、堀之内II式以降は前記3地点にわたって、その存在をみることになる訳である。しかも、安行式土

器群の時期になると広畑貝塚の順で述べたところの「製塩土器」の存在が顕著になってくる。この「製塩土器」の存在に関しては、総じてこの地域の後期末から晩期にわたる遺跡においては、出土量の多少はあっても、〝必ず伴出する〟といってもよいほどの出土事実が、各遺跡にみられることを付記しておく。

南 貝 塚（第5図－9）

桜川村大字阿波南に所在する本貝塚は〝阿波の大杉様〟として地域の人々に親しまれている大杉神社の存する台地南側斜面に貝塚を伴って営まれた遺跡である。

この遺跡を最初に発見し注目した人は、大野一郎、清野謙次両氏であり、大正末期いわゆる「厚手式土器」の出土遺跡として学界に公表したのであった。この「厚手式土器」は、周知の如く後の考古学研究の進展により、加曽利E式土器と型式名を与えられたのであるが、当時はいまだ土器型式の分類が完全に体系づけられておらず、大森貝塚出土のいわゆる「薄手式土器」に対して、陸平貝塚出土の土器群を「厚手式土器」あるいは「陸平式」と呼称していた。筆者が、本遺跡を踏査した時の観察では、これら中期後半の加曽利E式土器とともに多量の後期初頭堀之内I式土器の存在も確めることができ、本遺跡の営まれていた時期が中期後半から後期初頭にかけてであることが予想された。また台地斜面に形成されている貝塚は、ちょうど、舌状台地の両小支谷谷頭斜面を中心として、貝の堆積を持っており、大・中型のカキ類、アカニシ、ハマグリ、オキシジミ、サルボウなどの鹹水貝類によって占められていた。現状は、畑と宅地とになっており、保存状態は良い。

和久保貝塚（第5図－10）

本貝塚に関する調査・研究は八木奨三郎、下村三四吉氏の研究（註11）を皮切りとして、辻　武雄、野中完一両氏（註12）大野一郎氏（註13）田沢金吾氏（註14）などによって行われてきており、営造時期の問題、貝塚構成の相違の問題などに検討が加えられて来ている。それによると、貝塚は舌状台地の両側支谷谷頭斜面に形成されており、一方にはハイガイ、カキ類、ハマグリ、アサリ、アカニシ、シオフキなどの貝類を持つ純鹹貝塚がみられ、他方の貝塚はシジミ類を混えて、鹹水貝のハマグリ、アカニシ、サルボウ、アカガイなどで構成された半淡半鹹の貝塚が存在していたといわれている。また、これらの貝塚が形成されていた時期についても、縄文中期から後期までの時期に相当すると記録されていたのである。

筆者が桜川村阿波字上久保に所在する本遺跡を訪づれたときには、先学諸氏が調査・研究をされた当時の面影は薄れ、台地上は宅地化されて、台地斜面に僅かな貝堆積を認めたに過ぎず、採集した資料を検討した結果、先学諸氏の発表にはみられなかった前期、関山式、諸磯a・b式と浮島I・II・III式などの破片を鹹水貝塚の地点から、更に半淡半鹹の貝塚地点からは、加曽利EII式に加えて安行II式、立木III式土器の破片を見いだすことができたのである。このことから、本遺跡の存続時期は、前記の中期から後期までの範囲から、前期から晩期前半期に至るまでという理解に切り換えて行かなければならないのである。この新事実は当地域における遺跡群の相互連関性を考えていく上に、従来の理解とは異なる新たなる問題の展開をしていくことになるであろう。

福田貝塚（第5図－11）

稲敷郡東村大字伊崎字福田に所在する本貝塚は薬師台、神明前、大畑の3地点に貝塚を伴う大集落遺跡である。この3地点の貝塚を筆者は敢えて同一遺跡として扱ったが、研究者によっては個々別個の貝塚遺跡として扱っている者もある。しかし、筆者としては台地上の土器散布の広域性と貝塚の近接という立場から、先に述べたように時期的な地点移動の事実とを併せ考えて、ここでは一遺跡として述べていくことにするのである。

本遺跡に関する研究も古くから行なわれており、下村三四吉、若林勝邦、佐藤伝蔵、清野謙次氏等明治、大正期の研究者が調査・研究に携って来ているが、中でも特に、清野謙次氏は数度にわたる調査から、本遺跡に関して「(前略)……七月十一日には、有名な常陸国稲敷郡大須賀村大字神明前貝塚を探った。今日は福田貝塚も全滅したが、当時は未だ非常に遺物に富んで、完全土器石器の数十個を獲るのは容易だった……。」と述べ、遺物包含量の膨大さを記録しているのである（註15）。

筆者が本遺跡を訪づれた時には、すでに貝塚といっても名のみで、ほとんど貝殻はみられず、土器が累々と堆積して、いわゆる「土器塚」的な様相を呈していた。採集遺物からみてみると、本遺

跡が営なまれていた時期は中期阿玉台から、晩期前浦式の時期まで在続していたことが知れ、他の複合遺跡の場合と同様に、時期的に地点移動を行っていたことがわかる。即ち、中期阿玉台式から加曽利E式の時期は福田大畑貝塚といわれる地点、後期堀之内Ⅰ式から加曽利BⅠ式の時期は、福田神明前と薬師台のZ地点からなる。貝塚地点、加曽利BⅡ式以降、前浦式にかけては、福田神明前貝塚の地点という移動がみられるのである。

また、貝類など自然遺物については、先述のようにほとんど構成物が現在では明らかにすることができないが、酒詰仲男氏のものを参考にしてみると、サルボウ、ハマグリが最も多く、次にアカニシ、アカガイ、ベンケイガイ、オオノガイ、シオフキ、オキシジミ、カガミガイ、などの鹹水貝類と稀にシジミ、カワニナ類が認められたとされている。また魚骨、獣骨類としてはマダイ、イノシシ骨が多く、シカが僅かに出土していると記録され、総じて、主鹹貝塚が形成されていたものと考えられる。

天神台貝塚（第5図－17）

本貝塚は、俗称〝阿波の入江〟の最奥部、桜川村大字阿波天神台に所在し、現在はすでにゴルフ場造成によって、湮滅してしまった遺跡である。

以前、清野謙次（註16）酒詰仲男（註17）氏等によって調査が行われ、その時は縄文後期の遺跡として紹介がされている。しかし、筆者は踏査の結果、これ等とは異なる資料を得たので、筆者自身の踏査結果に基づき、私見を述べることにする。

本遺跡は、〝阿波の入江〟最奥の一小支谷側壁斜面に貝塚を伴い、台地上に土器散布地を持っており、時期的には早期中葉・田戸下層式と後半・茅山式、中期後半・加曽利EⅡ式に営まれたものと思われ、当地域最古の遺跡ということができるのである。また、伴なっている所の貝塚は、規模的に小さいものであり、アカニシ、サルボウ、ハイガイ、カキ、ハマグリなどの鹹水貝類によって構成されている貝塚であった。この事実は近在に位置している所作貝塚、和久保貝塚などとの関係を考えていく上に、大変興味深い問題をなげかけるものと思われる。以上、台門貝塚を中心として俗称〝阿波の入江〟を取りまく遺跡群について述べて来たのであるが、次に〝阿波の入江〟前面に位置している浮島の遺跡群の在り方について続けて述べてみることにしよう。

上の台貝塚（第5図－12）

本貝塚は、昭和33年、郷土史家・故浜田作衛氏によって発見された遺跡で、浮島の中心をなす洪積台地上を開析した一溺れ谷谷頭部を利用して占地しており、桜川村大字浮島字上の台に所在する。

貝塚は、堆積層が深部に存在しているため、ほとんどみることはできない状態であるが、僅かに地表に散乱しているものを検分する限りにおいては、鹹水貝類によって占められているようであり、採集土器も早期田戸下層式と前期の諸磯a・b式の破片が認められている。現状は山林と畑地にはなっているが、いまだ調査がなされていないために詳述はできないのが実状である。しかし、浮島島内においては現在までのところ最古の遺跡ということができるのである。

岡の内遺跡（第5図－13）

本遺跡は桜川村大字浮島字岡の内及び貝ヶ窪を指し、研究者によっては岡の内遺跡と貝ヶ窪貝塚との2遺跡を考えている者もあるが、筆者はここで「貝ヶ窪」と呼ばれる小支谷谷頭斜面に貝塚を伴い、台地上「岡の内」に土器散布地を持つ一遺跡と理解することにする。

本遺跡の所在が、学界に知られるようになったのは、明治年代の若林勝邦、佐藤伝蔵両氏の功績（註18）によるもので、その後、大山柏、酒詰仲男、山内清男氏等が調査・研究をされ、中でも山内清男氏は前期諸磯式に比定するべき、「浮島式土器群」の存在を注目、暗示されたのであった。また、昨今では西村正衛氏による調査も行なわれ「貝ヶ窪貝塚」を標準遺跡として、以前山内氏が注目された土器群を「浮島式」として幾つかに型式分類を行ない、前期諸磯b式に比定する東関東の一文化圏の存在を発表されるに至ったのである（註19）。

しかし、これら諸先学による一連の研究もその主眼はどうしても「貝ヶ窪」と呼ばれる貝塚地点を中心としているに過ぎず、本遺跡全体の中における土器群の在り方とか、本遺跡の構造解明のための研究は、なおざりにされてきたのであった。

筆者は、本遺跡を述べるにあたりかような研究の流れを考える時、早急に多くの研究者が遺跡の構造という面に立脚した遺跡、遺物の理解をされることを願って止まないのである。

さて、本遺跡の営まれた時期であるが、故浜田作衛氏の収集品や筆者の採集品を総合して考えてみると早期中葉から中期後半期に至るまで在続していたものと思われる。土器型式の上からは、田戸下層式、茅山式、関山式、黒浜式、諸磯a・b・c（浮島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）式、下小野式、阿玉台式、加曽利E式などの諸型式のものがみられるのである。

また、貝塚を構成している貝類としては、ハイガイ、カキ類、アカニシ、チョウセンハマグリ、ハマグリ、アサリ、オオマテガイ、オキシジミ、カガミガイ、マルサルボウなどを見ることができ、稀にオオヘビガイ、アワビなどが知れる。このほかの詳述は、西村正衛氏の調査報告にゆずることにしよう。

平山遺跡（第5図－14）

本遺跡は、浮島の東側湖成段丘上に営まれた遺跡で海抜標高5～10mの高度に位置している。いまだ、調査が行なわれた記録がなく、規模、構造は不明な点が多いのであるが、貝塚を伴っている。現状は畑地であり、礫混りの砂地で、時期的には後期加曽利B式から、晩期荒海式に至るまでの土器群を包含しているようである。また、本遺跡からは、他の低地遺跡と同様に大量のいわゆる「製塩土器」の破片が見出されており、縄文製塩にかかわる遺跡と考えることができるようである。

尾島遺跡（第5図－15）

浮島字宮ノ脇に所在する本遺跡も、前期平山遺跡と同様の立地傾向を示している遺跡である。時期的には、後期安行Ⅰ式から晩期中葉まで存続したものと思われ、やはり製塩土器の破片を数多くみることができる。

前浦遺跡（第5図－16）

本遺跡は、島内中央に位置する洪積台地の西南側低地帯に拡がる遺跡であり、現在、その殆んどが宅地化されている浮島字前浦に所在している。本遺跡に関する研究は昭和30年代に山内清男によって、晩期前半期、南関東における安行ⅢC式に比定される東関東地方の土器群として、いわゆる「前浦式土器」の標準遺跡として探求されたのが最初であるが、当時は共伴関係の実態がつかめず、不成立に終ってしまった経緯がある。しかし、昨今、他の地域でこの問題が推進され、現在ではほぼ間違いなく共伴することが証明され、地域的な分布圏を持つものとして「前浦式」の型式が成立するに至ったのである。

また、本遺跡の営まれていた時期であるが、後期中葉から晩期の終わりまで継続して存在しており、その後、弥生中・後期から平安以降に至るまで〝島〟という特殊性から、その足跡をたどることができるのである。しかも本遺跡においても、製塩土器が極めて多量に存在しているのである。

後九郎辺遺跡（第5図－18）

浮島字後九郎辺に存在する本遺跡は、前期尾島遺跡に隣接して位置し、遺跡の概観は殆んど変るところはみられない。未調査のため構造的には不明な点が多いが、営まれていた時期なども同様である。同一遺跡である可能性は極めて大きい。

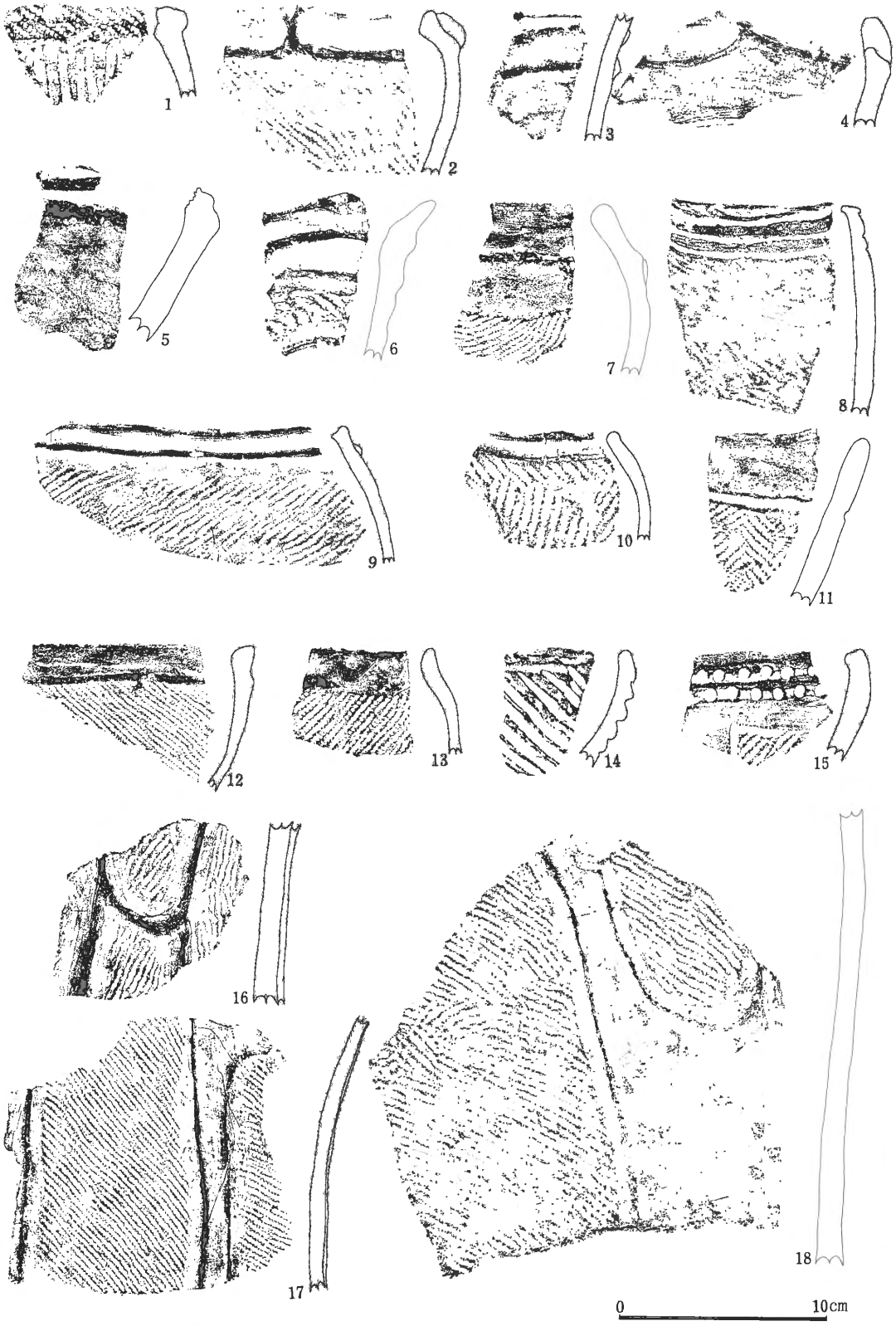
以上、浮島における遺跡群の在り方について述べて来たが、前述した〝阿波の入江〟に面している遺跡群とともに、当地域の縄文時代の生活を考えてもらいたい。そこにみられた人々を取り巻く気候、風土などの環境の移り変わりと、それに対する人々の働きかけという行為を相加味することによって、その中に存在した「台門貝塚」の位置づけを理解してもらいたいのである。

Ⅴ．おわりに

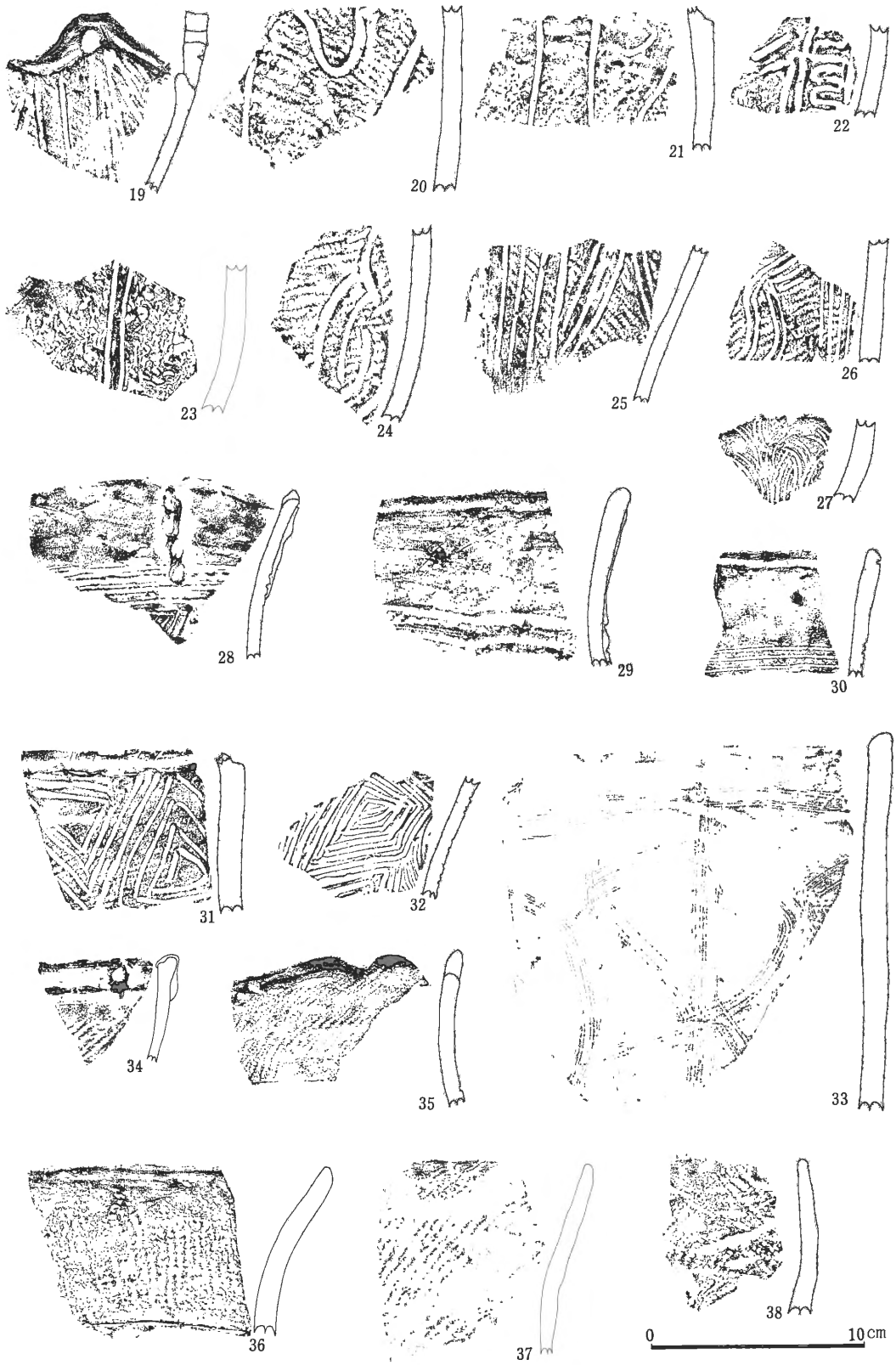
最後に、筆者は何故このような変則的な資料紹介の仕方をしたのかということについて私見を一言述べておくことにする。

従来は私自身も、「僅かな資料」をもって、型式論や遺物観をこまごまと書きつづった経験をもっている。しかし、はたして考古学の研究において「資料紹介」というものが、それだけの段階で良いのであろうか。私は、昨今頓にその進度を極めて推し進められていく、開発という名の下の遺跡破壊の現状を眼の当りにするとき、遺物個々に対する資料紹介より以上に、それらの遺物を包蔵しつつ〝頻死の状態〟にある遺跡をなんとか汎くアッピールしていかなければならないという気持ちを持つようになったのである。

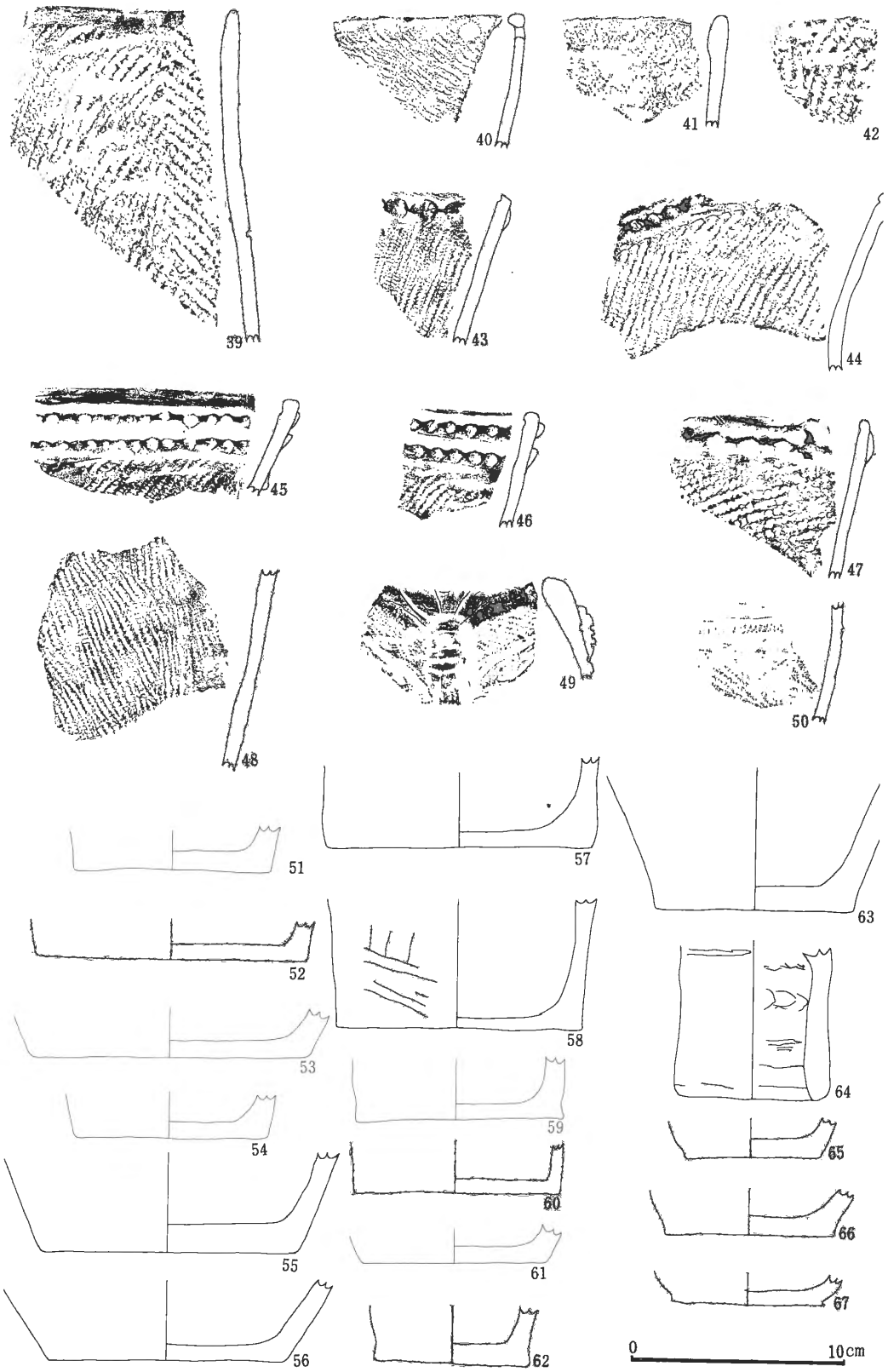
例えば、私達が遺跡踏査に出かけ、そこで最初に眼に飛び込んで来るのは何であろうか。ブルドーザーやパワーショベルなどによって無惨にも傷口を曝け出している遺跡であり、キャタピラの下敷きになり、粉々に砕けてしまった土器ではなかろうか。我々は、それを見て歯ぎしりしながら



第３図　台門貝塚採集土器拓影図(1)



第4図　台門貝塚採集土器拓影図(2)



第5図　台門貝塚採集土器拓影図(3)

何を考えて来たか。〝遺跡を保存していこう〟と、しかし、現実に我々の力だけで、どれだけのものが守りきれるのだろうか。我々が知らぬ間に破壊され湮滅の憂き目をみる遺跡が多数存在することは、誰もが否定できないであろう。

そこで、私は考えた。少しでも多くの遺跡をより広い範囲の人々に知らしめ、理解を深めて行ってもらおうと……。かような見地に立って、私は今回の試みを敢えて行ない、多くの人々の御意見を拝聴いたしたく思うのである。

（千葉市教育委員会文化課・主事）

〔脚註〕

1．茨城県教育委員会「茨城県遺跡地名表」（昭和39年）

2．佐々木忠次郎、飯島　魁「常州陸平介墟報告」『学芸志林』6（明治13年）

Iizima and Sasaki「Okadaira Shell—mound Hitachi」Memoir of the Science Department, University of Tokyo 2

3．八木奨三郎、下村三四吉「常陸国推塚介墟発掘報告」『東京人類学雑誌』8－87、（明治26年）

4．鳥居龍蔵（常陸吹上貝塚より発見の人類大腿骨に就て」『人類学雑誌』14－156、(明治32年)

5．慶応義塾中等部考古会「茨城県土浦市上高津貝塚発掘調査報告」『Archaeology19』昭和29年

6．清野謙次「日本原人の研究」（大正14年）

7．清野謙次「常陸国稲敷郡阿波村四箇大室貝塚第二回発掘」『社会史研究』9－5、（大正12年）

8．高橋良治「茨城県大室貝塚出土の中期縄文土器」『考古学手帖』20、（昭和38年）

9．中村嘉男「広畑貝塚の粗製土器」『金鈴』6（昭和30年）

近藤義郎、岡本明郎「土器製塩の上限について」『日本考古学協会第27回総会研究発表要旨』（昭和36年）

近藤義郎、「縄文時代における土器製塩の研究」『岡山大学法文学部学術記要』（昭和37年）

10．註3に同じ

11．註3に同じ

12．辻武雄、野中完一「茨城県信大・河内両都に於ける石器時代の遺跡」『東京人類学雑誌』9－92（明治26年）

13．大野一郎「北相馬、印旛、稲敷三郡における貝塚の淡鹹及び土器の厚薄分布表」『考古学雑誌』17－11（昭和2年）

14．田沢金吾「霞ヶ浦行」『史前学雑誌』3－5（昭和6年）

15．清野謙次「霞ヶ浦沿岸の貝塚巡り第1回紀行」『社会史研究』9－1（大正12年）

16．註6に同じ

17．酒詰仲男「日本縄文石器時代食料総説」（昭和36年）

18．佐藤伝蔵、若林勝邦「常陸国浮島村貝塚探究報告」『東京人類学雑誌』10－105（明治27年）

19．西村正衛「茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚」『早大教育学部学術研究』15－1（昭和41年）